

た。首長は戦後オランダ軍大尉となり、私の集積所在動
中も便宜をはかっていただいた。そして、引き揚げ時に
は港まで見送りを受け、オランダ軍の無法むたいな仕打
ちからかばっていただいた。

私たちの復員船は最後に近い便の米軍LSTであつ
た。船内給与はすべて自給自足、内地からの補給は受け
ずまかなった。また甘味品やチリ紙も支給し、記念とし
てコーヒー豆も茶碗二杯分ずつ配給した。

六月十六日和歌山県田辺港に上陸復員したが、その夜
「総括」と称し下級兵士による上官つるしあげがおこな
われた。さいわい、私は仕返しにあわずすんだが、上官
のなかにはひどい仕返しを食った者もあった。ある中隊
長のごときはいちはやく逃亡し、復員証明書・帰省旅費
も受けなかったということである。

南海孤島での守備隊

神奈川県 萱野 明

北支派遣軍でかくかくたる武勲によくした第三十五師
団（東兵团）に南方戦線転出の天命がくだった。ときに
昭和十九年三月初旬であつた。

物量をほこる敵連合軍の攻勢のまえに守勢に転じ、し
だいに圧迫され、ガダルカナル島をはじめ多くの島嶼を
失い戦雲急をつけつつあつた。東第二九二九部隊（潜水
部隊）は青島の桜ヶ丘に各連隊と共に集結す。十日間滞
在して、弾薬、食糧を補給する。輸送船団は十一船団と
なり、夜中出航する。

このころ米軍の制空、制海権のため移動もままになら
ず、南海に直行できないはめとなり門司にむかつたが、
さらに状況悪化のため横浜港へと航路を変更する。横浜
の高島栈橋に一週間碇泊、やっと父島にむかつて出港し
ました。

父島港に着くと湾内に貨物船がマストを出して沈んでおり、むなしく思う。海岸には傷病兵が白衣の姿で療養をしていました。一週間碇泊し状況を察知、即時南下してあの広い海原に出たが、どこも、かしくも爆雷が敷設され危険が目前にあた。なお、空にはB29が飛来しており友軍機はみることができない状況でした。まさしく玄海灘、台湾沖では九船団が撃沈され、尊い陸軍の兵士は、海の藻屑と消えてしまいました。私達はただ、船上で合掌し、心から御冥福を祈るのみでした。

魚雷をまぬがれた四隻は、危険な航海をつづける。私達の輸送船は大阪商船の「三池丸」でした。日夜甲板に出て交代で対潜監視の任務につく。やっこのことでパラオ島に着く。半日はど上陸しましたので、パラオ神社に武運長久を祈る。パラオは兵たん基地であり、南海派遣軍の各島に食糧、弾薬を送る補給地でした。港内には沈められた船がかさなりあっていた。そのようなすをみて、とても悲しく心がいたんだ。

ここから南域は、最大な危険区とのことで、巡洋艦「夕張」に移乗する。それに警護として駆逐艦三隻が護衛

する。軍艦はやはりスピード感があり快適に思う。

数時間が経過したころ、艦内放送にて、つぎに呼ばれる兵は途中の島に上陸するよう命令が出る。そのなかに私の名前も呼ばれた。果たして、どんな守備につくのか天命に待つばかり。

巡洋艦「夕張」の航海が一夜明けて、昼ごろ海軍の兵隊さんが「みよし」船の先端で輪投げをして、ひとときを楽しんでおりました。はいらないと頭にパチンが飛ぶ。その仲間に、胸の注記に茅野為男さんの名前が目にはいりました。まあ、こんな南海洋上で偶然にも同じ町内でそばにいた人がいるとは信じられませんでした。私が肩に手をやって

「為男さん」

というなり、びっくりして、その瞬間、よろこびに変わりました。そのときは二人ともチャイナマーブル(大きい支那の鉛玉)のような涙が出ていました。

彼は軍艦のかじとりで優秀であった。それに当日は週番兵長で樫の棒をもって甲板内を巡回していた。二度目の私との対話で、航海中は酒保を開けられないがと申し

ながら夕方、別れの意味で、「ゴールデンバット」「ほまれ」の煙草といろんな果物の缶詰、また海軍の衣服、作業衣の真新しいのもくだった。島に上陸したら使ってほしいとのべた。とても御厚意を感謝し、ありがたかった。

巡洋艦「夕張」は昭和十九年四月二十八日朝我々の東第二九二九部隊（清水部隊の一部）九百五十人、第一大隊長横山鶴蔵大尉をセントアンドレウ諸島ソソル島に上陸させる。他にトコベイ島、メルリー島にも分散する（この三島は横山大隊長の指揮下です）。無事上陸が完了して、ただちに糧秣の米を運搬する。

上陸して二時間後、島の沖合で大きな爆発がおこった。即時に大隊長のもとに連絡がはいり、ただいま「夕張」は中央部の機関室に魚雷が命中し航行不能となったよし。茅野為男さんは大切なかじとりで一生懸命であったろうが。話によると、俄雨（スコール）がかんだんなく降る、霧やモヤのようで魚雷がみえず、おしくも八発目が命中したよし。この辺の海は鮫が多いので、必死に海軍の兵士達は泳いだのであろう。それでも護衛のため

の駆逐艦「五月雨」他一隻に次々に助けあげられたとのことでした。犠牲者もあつたことと推察いたします。「夕張」は、駆逐艦にえいこうされ、バラオ島に向かったが、途中の海域で沈没したとのことでした。

上陸後、南海派遣ソソル島の守備の任務が続行する。命令によれば、東第二九二九部隊はニューギニヤ方面に進出しましたが、数か月後には連隊旗のもとに清水部隊長以下将兵は玉砕したとの由。連隊旗は山中にて焼却したとの悲しい情報となる。我々の島は、東海岸から西海岸まで八百メートルで横が約二キロの小さな島でした。したがって日本の陸軍が上陸したので、島民は、生活が出来なくなり無人島に、それぞれカヌーで島を出て行く。

また日本の南洋拓殖会社（礪石採取）の十人ほどの方々もバラオから来た小さな船で引き揚げました。第二船のむかえ船は、爆雷が多くふせつされて到着がおくれましたが、その船で床屋さん一家（横浜市浦船町出身）他経節製造会社の人々も帰りました。

我々は日夜、敵をそしするための警備は厳重であつ

た。海岸線に立哨して対潜、対空監視の見張りをおこなわない。艦砲射撃があれば、もう全滅である。

そのうちに毎日B 29、グラマン、コルセヤ等が飛来しては低空で機銃掃射で攻撃し守備隊の被害は甚大となる。

また空から燃料の空になったドラム缶に引火して地上に落とすのでヤシの葉が燃えて電柱のようになり、かくれ場所がなくなってしまった。ヤシの木を切り倒して各所に防空壕を掘っても焼け石に水でした。機関砲、速射砲丸も弾薬不足のため、抵抗せずの状況でした。補給がないため、米軍が上陸したさいの非常弾薬となったからである。

食糧も次第に心細くなってきて配給が少なくなる。各中隊、各小隊で栄養失調の兵士がふえてくる。山にはいって雑草などを採りに歩くが、「赤虫」といって目には見えないほどの小さい虫であるがたくさん足などにたかって、それこそ、かゆく、はれものとなり痛くて歩行困難になってしまった。医薬品もなく、日々の苦しさが増す。

昭和二十年以降の食糧は七五グラム（米食一人一日当りマッチ箱一杯）。代用食はパイヤの根軸（主食）、南洋イチヂク、ゼンマイ、タロ芋、南瓜、同花、ヤシミツ、パンの実、南洋リンゴ、魚、とかげ、ねずみ、かに、海のみみず、その他。栄養が取れなくなったため、毎日各隊で二人、三人と戦病死するようになりました。

栄養失調になると死にいたるまで、やせたり、むくんだりの連続で、ついにひたいの「みけん」に青すじが出ると致命的です。そのため逃亡兵が出るようになる。数人グループで、食糧を山へ行ってたくわえ一か月分ぐらい確保すると、カヌーを出して無人島へ逃げたが海流のはげしさと、地図がわからず、米軍機に発見され捕虜となる。また途中海がしけでもどって帰り、衛兵所前で「たくわえた食物」を食べて自殺する。また内務班で、栄養失調がひどくなり、明日の望みを捨て、小銃や手榴弾で命をたった方もいました。

このころ漁労班、農作班をつくる。カボチャ等はじゅくさないうちに夜中になくなるしまつ。ソンソル島も通信のバッテリーがなくなり、各島との連絡が途絶する。

八月十五日の終戦も知らずにいた。数日後、米軍機により通信筒が投下された。内容は各島は降伏したとの終戦の知らせであった。だが将兵はデマと思って信用しなかった。その後、今度は友軍機が投下した。それを拾って読むと、ミズリー号艦上で、日米首脳が正式調印をして終戦となったむねの通信であった。これによってわかり、何月何日島の南端の海岸に白布の十字のしるしをおいて待つようにとあった。

其の日がきた。生存者全員、大隊長とともに整列、眼前に銃や軍刀、書類、写真、軍隊手帳等携行品を一斉提出し山積みされ、またたくまに焼失されました。

一週間後米国軍艦が接岸し、上陸、一か月ほどの食糧、乾パン、ビスケット、肉の缶詰、フルーツ缶詰、乾ブドウ等配給してくださる。栄養失調で体の内臓が弱っているため、米軍は、一日の規定量をオーバーして食べないように指示をあたえてくれたが、空腹のため多量に食べた戦友は死に至った。

一か月して待ちに待った復員船が米軍艦と共に島に着した。

さあ、ながく続いた戦争も終わり内地に無事帰還できるのかと思うと生存できたことに心から感謝した。私などは、あと一、二か月の寿命だったと思う。それこそ「みけん」に青筋が走っていたからである。船のタラップのはしごがあがれない病人の仲間に入れられて担架ではこばれた。

復員船は「酒匂」でした。船倉にいるよりも心が晴れるため、デッキにときどき出ては過ぎ去る島々をみながら故国に近くなる予感にひたる。船内で死亡された戦友は、お気の毒に毛布に包んで水葬、海に沈められました。甲板でみんなで合掌礼拝する。

十一月三日、文化の日。横須賀、浦賀の砲術学校へはいる。いろいろと手続きを済ませ、五日の夕方家に電報を打つ。中隊長から病院へはいるよう勧められましたが老いた父母に会いたいばかりにおことわりしました。生き残りの戦友達と西に東に別れて門をでる。そのとき、岡本中隊長が、

「これで元気になったら九十五歳まで生きられるよ」と申されました。体重は三十七キロでした。丁度足のも

もの太さが、手ほどしかありませんでした。なつかしい横浜駅について市電に乗る。私は白い手袋をして、十一柱の遺骨を抱いておりましたが、敗戦の惨めさか、座席をゆずってくれませんでした。

家について、焼けトタンのバラックの家に背嚢を降ろし、そのまま、ひっくりかえってしまいました。それでも内心うれしさがこみあげてまいりました。丁度本牧では、鯛やコハダがたくさんとれておりましたので、いわしだんごや焼魚で栄養をとることが出来ました。帰ってから自分のあいだ、耳がふかふかになって聞こえず、困った毎日でした。

十日間たってから母と一緒に野毛山の横浜連隊区司令部に御遺骨をおさめてまいりました。そして相模原、海老名とご遺族の家を母に連れられ、報告にまいりました。

これで第二方面軍、第三十五師団池田中将閣下指揮下のセントアンドレウ諸島ソンメル島守備隊を終わります。